



NEWS

No. 155
March 2014

(公社) 日本工学アカデミー広報委員会
Office : 〒108-0014 東京都港区芝 5-26-20
建築会館 4F

Tel : 03-5442-0481
Fax : 03-5442-0485
E-mail : academy@ej.or.jp
URL : http://www.eaj.or.jp/



第16回東アジア工学アカデミー円卓会議開催報告

国際委員長 小泉 英明 / HIDEAKI KOIZUMI

今回で第16回目となる東アジア工学アカデミー円卓会議が、2013年12月16日を中心に東京三田のセレスティンホテルで開催されました。本円卓会議と併催シンポジウムは、当初、一昨年9月後半に福岡で開催される予定でしたが、政治的な緊張が高まる中で一旦延期の措置が取られました。しかし、日本・中国・韓国の円卓会議メンバーアカデミーは、できるだけ早い時期に円卓会議を実施すべく地道な努力を続け、この度、東京で開催ができる運びとなりました。15年間に亘り、緊密に持続してきた学術の絆を、何としても大切にしたいという三カ国アカデミーの強い願いからでした。

中国のChinese Academy of Engineering: CAE(工程院)からは、Kechang XIE副院長を初めとする5名の使節団が、韓国のNational Academy of Engineering of Korea: NAEKからは、Dongwha KUM副院長を初めとする6名の使節団が来日しました。主催国アカデミーを代表して、日本工学アカデミー (EAJ)の小宮山宏会長が歓迎の挨拶の後、引き続き議事進行を担当されました。



前列左から3人目：XIE氏(中国)、
同4人目：KUM氏(韓国)、
後列左から2人目：三島望委員、
同4人目から右へ神本委員、小宮山会長、
小泉委員長、山田興一会員、
右端：玖野峰也常務理事

日本からは、一昨年9月に福岡で開催予定であった併催シンポジウムの予稿集『人々の安寧とより良き生存へ向けてのエンジニアリング』(Engineering towards Human Security and Well-Being)が、再度、席上配布され、三カ国アカデミーの連携趣旨と、講演予定者の先生方が目指した工学の将来方向について再確認がなされました。また、韓国からはそれぞれ三カ国の工学アカデミー会員が現在重要と考えられる工学テーマと、三カ国連携の意義に関する意識調査の結果が発表されました。初回の調査テーマはグリーンテクノロジーですが、日本側は、神本正行国際委員が中心となって、事務局とともにEAJ内の調査を行ったものです。認識の共通項と三カ国それぞれの特長点、今後の方針が席上で討議され、統計上の確認を行った上で今春公表する方向が確認されました。また、最近の主要な活動内容がそれぞれのアカデミーから報



円卓会議

告され、さらに、中国が今回希望された「新世紀が直面するエネルギー政策：エネルギーの生産・消費パターンの変化」に関する討議が行われました。エネルギー需要供給の見通しのシナリオ、また、エネルギーグリッドの具体内容が議論されました。

主要会議が終了した後、大久保彦左衛門の武家屋敷跡の八芳園へと会場を移し、日本庭園に残る紅葉を觀賞した後、懇談会が開催されました。XIE 副院長が持参された故郷の銘酒を中心に乾杯が繰り返され、三カ国間の徹底した親善が図られました。翌日は、テクニカルツアーと日本文化を紹介するツアーで横浜から鎌倉に入り、住友電工横浜製作所のご厚意で、世界最初の大型レドックスフロー電池と集光型太陽光発電を組み合わせた畜発電システムを見学しました。また、臨濟宗大本山円覚寺で禅の文化を、そして横浜ランドマークタワーへ移って、中国

使節団が強く希望されていた「正式な茶席」で日本の茶の湯の心を学びました。今回の円卓会議は、計画を開始したのが2011年の初夏でありましたが、一昨年の開催延期を経て2年半越しで実現したものです。

今回は中国が主催国となる順ですが、今年に創立20周年を迎える中国工程院は、国際工学アカデミー連合(International Council of Academies of Engineering and Technological Sciences: CAETS)の総会主催国を務めます。そのために今回は韓国が主催国を務め、9月に済州島で第17回東アジア工学アカデミー円卓会議が開催される予定です。

日中韓友好の場を盛り上げて下さった小宮山会長、ご協力下さいました企画・運営委員会並びに国際委員会の諸先生方、そして種々の困難な状況を乗り越えて円卓会議を成功させて下さった事務局の皆様に深く感謝申し上げます。

NEWS

2013年秋の会員の叙勲 旭日大綬章受章の宮津純一郎会員のご業績



本アカデミーの宮津純一郎会員におかれては、平成25年秋の叙勲で旭日大綬章を受章されました。心よりお祝いを申し上げます。

宮津純一郎氏は、日本電信電話株式会社(NTT)社長として情報通信産業を牽引し、我が国の高度情報化社会基盤の発展に多大な貢献をされました。宮津氏はNTT入社以来技術畑を歩み、ネットワーク事業本部長、ネットワーク高度化推進本部長、副社長を歴任後、1996年に社長に就任しました。日本を代表する情報通信企業のトップとして社会・産業の方向性を展望する「マルチメディア基本構想」を立案し、電話

会員選考委員会幹事 石原 直 / SUNAO ISHIHARA

からマルチメディアへの変革を牽引しました。特筆される業績はNTTの経営形態として「持株会社方式による再編成」を実現したことで、NTTの経営革新に留まることなく我が国高度情報通信社会の発展に大きく貢献されました。

宮津氏は、公的活動においても多くの業績を挙げました。学術界においては、電子情報通信学会会長として新たに「ソサイエティ制度」を導入して学会活性化の礎を築きました。また、電気通信事業者協会会長として政府のサイバーテロ対策における情報通信ネットワークの安全・信頼性基準の改正への貢献、政府の中央防災会議の委員として防災基本計画の作成や災害復旧対策立案などの業績があります。

このように宮津氏は、大変革時代の情報通信のパラダイム変革、事業経営・技術開発のあり方などを自らの歴史観に基づいて提示し、発展を牽引してきました。ここに、工学者、技術者、経営者に対して今後ともご指導を賜りますようお願いを申し上げます。

北海道・東北支部主催の講演会が、平成25年12月19日(木)の14時10分から東北大学片平北門会館2階エスパスを会場にして開催され、約20名が集まった。副支部長の井口泰孝先生の司会のもと、尾坂芳夫支部長が、開会の挨拶の後に、支部設立後1年間の活動の概括と、理事会で話し合われてきた理科離れへの対策、支部活動の見直し、各支部理事による地区活動の提案について報告された。引き続き、以下の2件の特別講演が行われた。

東北大学大学院工学研究科長の金井浩先生から「(1)東北大学工学研究科における教育改革」と「(2)新しい医用超音波診断を目指して」の2つの課題についてお話しいただいた。(1)の課題では、工学部・工学研究科の学生が学問の面白さに気付き進んで勉強するために、また問題のある学生のために、学生・教員・研究室・事務のそれぞれが取り組む改革について紹介された。会場からは6件の質問があり、議論が大いに盛り上がった。(2)の課題については、先生が研究しておられる超音波による血管診断、ドップラー効果による血流測定、心筋の診断など、新



尾坂芳夫支部長



金井浩会員

しい超音波診断法についてご紹介いただいた。

東北大学大学院環境科学研究科教授の安田喜憲先生による「日本列島の国土強靱化とは」と題する講演では、大震災を経験した学生達の深い感性に驚かされたことが最初に述べられた。先生の研究グループが行った福井県の水月湖の湖底ボーリングによって、1年ごとに数万年前まで続く縞(年縞)が見つかり、これが2012年に世界の標準時計に認められたことが紹介された。次いで、ユネスコの世界文化遺産を決定するブノンペンでの会議で、富士山が山・里・海を繋ぐ水の循環を支えることにより日本文化が形成されたことを訴えたこと、そして東日本の海岸に計画されている大堤防が森里海の連環を壊す懸念があることを強調された。会場から3件の質問が出た。

講演会を17時20分に終了後、会場を隣のセリシールに移して、17名出席による懇親会が開始。谷口尚司支部理事の司会のもと、副会長の阿部博之先生の開会の挨拶のあと、和やかな情報交換が行われた。懇親会は19時10分に終了。なお、今回は平成26年4月に秋田で開催予定である。



安田喜憲氏



阿部博之副会長

日本工学アカデミー九州支部講演会「日本の科学と工学の原点を学ぶ」は2014年1月24日(金)に九州大学伊都キャンパス(ICNER 1Fホール)で、日本工学アカデミー九州支部主催、九州大学カーボンニュートラル・エネルギー国際研究所(WPI ICNER)、九州大学先端物質化

学研究所、九州大学シンクロトロン光研究センター、日本結晶学会、日本化学会共催で開催された。

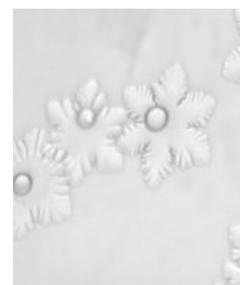
当日は寒い日であったが、学部学生、大学院生、学術研究員、現役の教員、名誉教授、さらには一般の方まで幅広い年代の方が合計約60名

参加され会場は熱気にあふれていた。

講演会はまず日本工学アカデミー副会長、福岡女子大学理事長・学長／梶山千里先生の日本工学アカデミーの紹介を兼ねた開会の挨拶に始まり、本講演会を企画した九大先導物質化学研究所／高原淳による、国際連合により制定された世界結晶年2014(IYCr2014)を中心に本会開催の趣旨説明が行われた。

講演会では中谷宇吉郎雪の科学館館長／神田健三先生が「寺田寅彦と中谷宇吉郎:世界結晶年IYCr2014にあたり」というタイトルで講演され、寺田寅彦により、Braggとほぼ同時に1913-1914年に報告されたX線回折現象の発見の経緯とその後の寺田物理学の展開について解説された。また寺田寅彦の弟子である中谷宇吉郎の雪の結晶とその科学的な展開の業績についての紹介がなされた。神田先生は氷のチンダル現象、あるいは氷の変形に関するデモ実験をされ、多くの参加者を惹きつけた。

コーヒブレイクの後には九州工業大学名誉教授の近浦吉則先生により「Yoneda-Peakを中心として：九大から生まれた、偉大な、早すぎた発見」という講演をいただき、近年、機能材料の



神田健三氏(左)とチンダル像(右)。「チンダル像」は、氷に光を当てたときに内部の何点かの核から融けてできる雪花の形で「アイスフラワー」とも呼ばれ、水と真空の泡からできている

表面を解析する微小角入射X線小角散乱で注目されている Yoneda-Peak の発見の経緯などが米田泰治先生(当時九州大学工学部助教授)の経歴とともに詳細に紹介された。続いて京都大学名誉教授・日本化学会化学遺産委員会委員長の植村榮先生より「化学の先達に敬意を払おう—化学遺産に関する日本化学会の活動—」という演題のご講演をいただいた。特に平成20年3月発足の「化学遺産委員会」により選定されてきた22件の認定化学遺産についてその選定の経緯と詳細な紹介がなされ、戦前の日本での先駆的な研究や産業の発展、また日本の化学の歴史をユーモアを交えながらご講演いただいた。



梶山千里副会長



高原淳支部理事



近浦吉則氏



植村榮氏

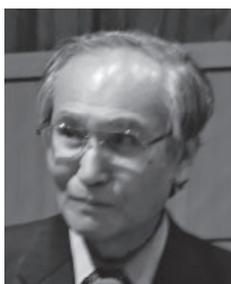
講演会終了後は伊都キャンパス内のビッグオレンジでミキサーを行い、シニアと若手の交流、熱い議論が行われた。



日本工学アカデミー・SRI International 合同シンポジウム 「ブレイクスルーイノベーションのための日米協力」

日米科学技術・イノベーションパートナーシップの強化プロジェクトリーダー
松見 芳男 / YOSHIO MATSUMI

本年1月28日、東京大学山上会館において、EAJと米SRI International共催のブレイクスルーイノベーション合同シンポジウムが、文部科学省、経済産業省、(独)科学技術振興機構(JST)、(独)新エネルギー・産業技術総合開発機構の後援の下、開催された。産学官、並びに在日米国大使館等から90名が参加した。SRI Internationalは、米国の有



松尾友矩理事



相澤益男会員



スティーブ・シージンスキ氏

力研究開発機関で、Sarnoff Corporation(旧名: David Sarnoff Labo)を保有し、スタンフォード大学とも緊密な関係を有する。同社は、Apple Computerに売却したSIRI等多くのベンチャーを育て、「研究の事業化」で実績を誇ると共に、DARPA(米国防総省高等研究計画局)やNIH(米国立衛生研究所)等米政府機関の受託研究も行う米国のinnovation powerhouseである。日本の成長と飛躍のためには、ブレイクスルーイ



パネルディスカッション:
左から有本会員、シーズンスキ氏、坂田会員、東條氏、鳥居会員、総合司会:松見リーダー

ノベーションが必要であるが、一方米国はインターネット等多くの実績を持つ世界のブレイクスルーイノベーションリーダーである。今回は、日米科学技術・イノベーション連携の強化を重視するEAJが、SRI Internationalと共に、ブレイクスルーイノベーションでの米国の強さを考察しつつ、日米協力について議論することとしたものである。松尾友矩理事の挨拶、相澤益男JST顧問の招待講演の後、シーズンスキSRI International副社長が、全米の頭脳を集めてhigh risk high rewardのプロジェクトを推進するDARPAのケースも取り上げ、米国におけるブレイクスルーイノベーションへの取り組みを説明した。パネルディスカッションでは、有本建男会員の司会の下、東條吉朗経済産業省課長、坂田一郎会員、鳥居邦夫会員及びシーズンスキ副社長が、研究と市場のギャップを埋めるための政府の役割などを中心に、活発な議論を展開した。シンポジウム終了後、ネットワーキングレセプションも行われ、多数の参加者が有効に交流の機会を利用した。



九州支部講演会「工学と医学・歯学の連携をはかる」報告

理事・副支部長 羽野 忠 / TADASHI HANO

九州支部では「工学と医学・歯学の連携による新たな学術・産業分野の創出に関する現状と今後の方向性を探る」を目的として、平成26年2月10日(月)午後、大分大学産学官連携推進機構セミナー室で講演会を開催した。九州支部に所属するアカデミー会員、大分大学の教員ならびに大学院生等63名が参加した。はじめに梶山千里副会長が(公社)日本工学アカデミーの歴史、役割、これから目指すところを紹介された。このあと羽野忠理事・副支部長の司会で、下記3件の講演が行われた。

(1)「東九州メディカルバレー構想の概要と、産

学官連携による医療機器開発への取り組み」 講師:大分大学医学部教授 穴井博文氏

臨床医工学講座に所属され心臓外科の専門医である穴井氏は、みずから取り組んできた人工心臓開発の足跡を紹介しながら、いかに機械工学の手法を生体に適用する中で医工連携を实践してきたかを話された。また穴井氏は、大分・宮崎両県で進んでいる東九州メディカルバレー構想を紹介され、産学官連携により医療機器産業の集積と地域経済への波及効果を図り、地域の活性化さらにはアジアへの貢献を旨とする構想を述べられた。



梶山千里副会長



羽野忠理事・副支部長



穴井博文氏



竹中繁織氏



宇田泰三氏

(2)「歯工連携による癌診断チップの開発—高齢者の生活の質の向上(QOL)を目指して—」
講師：九州工業大学工学部教授 竹中繁織氏

竹中氏はこれまで開発されてきた電気化学的バイオチップ技術を、歯工連携によって、高齢者の口腔ケアのための歯周病や口腔癌の診断へ発展させた成果について解説された。現在、世界では半導体産業を基盤とする産業構造がライフイノベーションへ変わりつつあり、同氏はこの変化を生かした研究展開の重要性を強調された。同氏らが最近開発したバイオチップ技術は、ライフイノベーション産業が発展するきっかけになると期待される。

(3)「スーパー抗体酵素分子の性質と可能性—高機能を何にどのように結びつけるか—」
講師：大分大学工学部客員教授 宇田泰三氏

宇田氏らが発表した新機能分子は、「スーパー抗体酵素」と名付けられて今日に至っている。講演では、この分子が抗体の特異的な反応性を維持しながら酵素的に抗原を分解するという、画期的な性能を有していることが紹介された。また新分子が見つかった経緯、新現象に対する論文発表の障壁、新機能分子の化学的、生化学的特長、革新的な医薬品開発や医工連携の可能性などについて説明があった。



岡村總吾最高顧問・第3代会長を偲んで

名誉会長・第6代会長 中原 恒雄 / TSUNEO NAKAHARA

岡村總吾日本工学アカデミー第3代会長が2013年10月26日に95才で御逝去されたとの急報を東京電気大学学長室より受けた。私は俄かに信ずることが出来なかった。というのはつい数日前に学士会館でお元気な岡村先生とお会いしたばかりであったからである。10月30日夜の日本キリスト教団・阿佐ヶ谷教会での前夜式で、お子様方にお伺いしたところでは、当日の朝まで全くお元気で、気が付いたら洗面所で何の苦しみもなく他界しておられた由である。しかも先に逝かれた先生の最愛の奥様と全く同じような状況であったとのことである。先生は理想的なご一生を終えられたと感じ、心からご冥福をお祈り申し上げた次第である。

岡村先生の日本工学アカデミーにおけるご功績は計り知れないものがある。第2代会長の向坊隆先生と共に、厳しい日米摩擦の解消を狙った日米ハイテクディスカッションの日本側の委員長を務められた。その際、米国側の委員長、フランク・プレス全米科学アカデミー会長らが、強く要望しておられたのは米側の交渉相手として望ましい日本工学アカデミーの設立である。数年後、紆余曲折を経て日本工学アカデミーが実現したが、先生はこれに大変ご貢献された。当時設立に貢献された元日本電気会長の小林宏治さん、日本工学アカデミーの国際工学アカデミー連合への参加を推進された元東大総長の向坊先生、その後を継がれて岡村先生は第3代会長に就任された。先生は日本工学アカデミーの国際



化と法人化を推進され、産学交互の会長就任制をご提案になった。そして当時日経連会長で三菱マテリアル会長の永野健さんに第4代会長を引き継がれるまで、内外の日本工学アカデミーの業務を精力的に務め上げられたのである。

先生の日本工学アカデミーの役職を辿ってみると、副会長：1993年5月～1994年5月、会長：1994年5月～1998年5月、名誉会長：1998年5月～2002年5月、最高顧問：2002年5月～2013年10月、となる。

私事で恐縮だが、岡村先生と私のお付き合いは、極めて長く親密なものであった。私は1953年春に東大工学部電気工学科を卒業後、ただちに住友電工に入社した。そこで長年上司としてお仕えした杉正男元副社長と岡村先生は大学の同級という関係で、先生とは研究上の様々なお付き合いがあった。先生に私の「薄膜誘電体表面波伝送線路」の論文の審査をお願いし、1961年東京大学工学博士の学位を頂戴した。これが

光ファイバー事業化のきっかけとなった。その後昨年4月19日の東大電気1953年卒業生の60年會に唯一のご生存の先生としてご出席いただくなど、長年親しくご指導を賜った。先生が日本工学アカデミーの會長時代は、私は副會長兼國際委員長として國際工学アカデミー連合の會合に度々お供をさせて頂いた。スコットランド、スイスなど欧州が多かったが、最も記憶に残っているのは、1995年6月下旬のスウェーデンでの會合である。同国の北端のキルナという北極圏の都市での會合に先生ご夫妻と私ども夫

婦で参加したときのことである。會議終了後、スウェーデン工学アカデミーのアレンジで、白夜、ラップランドに昔から住む人々の社会と文化、有名な鉄鋼工場の見学などをし、さらに国境を山越してノールウェイにわたり、ラピッドと称する急流の冒險的小舟下りをし、豪華な数時間のフィヨルド下りの船旅をしてオスローに到着するという行事を楽しんだ。このときの楽しい旅のことは忘れることが出来ない。今や先生は奥様とあの時のことを語っておられることをお祈りして弔意を表したい。

NEWS

賀詞交歓會

常務理事 玖野 峰也 / MINEYA KUNO



小宮山宏會長



中原恒雄名誉會長

1月16日正午からホテルJALシティ田町において賀詞交歓會が開催され、小宮山宏會長が年頭挨拶として「工学への期待が高い今こそ各国の工学アカデミーと共にEAJも社会の期待に応えたい」と訴えられ、中原恒雄名誉會長がNAEのドレーパー賞に触れつつ乾杯の音頭を取られた。

新入正會員のご紹介

(2013年11月入會者)

〔第1分野〕

なるせ じゅん
成瀬 淳



岡山大学産学官融合センター客員教授

1945年京都府生まれ。1970年京都大学大学院工学研究科修士課程を修了し、(株)日立製作所に入社。設計畑を経て事業部長、米国で系列2会社の社長を歴任し、帰国後技師長。真の國際人を育成すべくMOTや起業工学の分野で学生や社会人の育成に努めている。

にった あきと
新田 明人



(一財)電力中央研究所特別顧問

1948年兵庫県生まれ。1974年京都大学大学院工学研究科修士課程修了、電力中央研究所に入所。入所後は主に火力・原子力発電用高温機器の寿命・余寿命評価研究に従事。2004年材料科学研究所長、2009年常務理事、2011年専務理事、2013年現職の特別顧問。

ふくだ としお
福田 敏男



名城大学理工学部メカトロニクス工学科教授

1948年富山県生まれ。1977年東京大学大学院博士課程修了、通産省工業技術院機械技術研究所研究員、1982年東京理科大学講師、助教授、1989年名古屋大学工学部教授。2013年より現職。日本學術會議會員。専門はロボット工学、マイクロ・ナノメカトロニクス。

ふじえ まさかつ
藤江 正克



早稲田大学理工学術院教授

1945年京都府生まれ。1971年早稲田大学大学院理工学研究科修士課程を修了し、(株)日立製作所に入社。日立では原子力・宇宙・医療福祉ロボットの研究開発に従事し、主管研究長を経て2001年現職。日本機械学会副会長、コンピュータ外科学会理事長などを歴任し、専門は生体の機械工学的制御技術。

[第2分野]

たけなみ ゆういちろう
武濤 雄一郎



(株)ブリヂストン常務執行役員

1956年山口県生まれ。1981年京都大学大学院(修士)及び1986年スタンフォード大学大学院(修士)修了。1981年から経済産業省に勤務し、技術、IT、知財等の政策担当を経験。同省特許庁審査業務部長を経て、2009年(株)ブリヂストンに入社。現在当社においてイノベーション、IT、知財などを担当。

ちのね なおき
茅根 直樹



愛知工科大学教授

1944年生まれ。東京出身。1967年東京大学大学院修士課程修了。同年(株)日立製作所中央研究所入社。1980年東京大学工学博士。1995年日立製作所光事業推進本部主管技師長、2001年日本オプネクスト(株)取締役事業本部長を経て、2005年より愛知工科大学教授。専門は、光デバイス、光ネットワーク。

ふかざわ よしあき
深澤 良彰



早稲田大学理事・教授

1953年静岡県生まれ。1983年早稲田大学大学院理工学研究科博士課程電気工学専攻修了。工学博士。早稲田大学理工学部電気工学科助教授、情報学科教授等を経て、2007年より早稲田大学理工学術院教授。2010年11月より理事。専門はソフトウェア工学。

[第3分野]

おおさか てつや
逢坂 哲彌



早稲田大学理工学術院教授

1945年群馬県生まれ。1974年早稲田大学大学院理工学研究科博士後期課程修了(工学博士)。1986年より現職。2010年春紫綬褒章(発明改良功績)等受賞多数。現在米国電気化学会(ECS)会長。専門は電気化学、エネルギーデバイス、高機能センサ、磁気デバイス等。

ちば やすひさ
千葉 泰久



宇部商工会議所会頭

宇部興産では生産現場から出発し、開発研究、設計建設業務に従事。対象も有機、無機、高分子と多分野研究の面白さを堪能しました。後半は副社長CTOとして相当な収益貢献事業を創出できたと自負しています。趣味は書道と読書、山口県ゴルフ協会会長でもあります。

〔第4分野〕

つかはら けんいち
塚原 健一



九州大学大学院工学研究院教授

1962年神奈川県生まれ。1985年九州大学工学部土木工学科卒業。同年建設省入省後、国土交通省、在インドネシア日本大使館、アジア開発銀行、国際協力機構等を経て2011年より現職。1993年ペンシルバニア大学大学院地域科学科博士課程修了。専門は地域開発、地域防災。

〔第7分野〕

むろふし きみこ
室伏 きみ子



お茶の水女子大学ヒューマンウェルフェアサイエンス寄附研究部門教授

1947年埼玉県生まれ。1976年東京大学大学院医学系研究科博士課程修了、医学博士。1996年お茶の水女子大学教授。2002年同理学部長。2004年同理事・副学長。2011年(株)ブリヂストン社外取締役。2013年より現職。専門は生化学、細胞生物学。日本学術会議会員。

やまだ まもる
山田 守



山口大学農学部長・教授

1954年山口県生まれ。1984年山口大学大学院医学研究科生理系生化学専攻博士課程修了(医学博士)。山口大学医学部助手、カリフォルニア大学研究員、山口大学助教授を経て、2001年より教授。2012年より農学部長。2009年～2012年総合科学実験センター長。専門は分子生物学や代謝工学。

〔第8分野〕

ゆうき あきお
結城 章夫



山形大学学長

1948年山形県生まれ。1971年東京大学工学部物理工学科卒業。同年科学技術庁に入庁。2000年研究開発局長、2001年文部省との統合後の初代文部科学大臣官房長、2005年文部科学事務次官。2007年退官後に国立大学法人山形大学長に就任。

INFORMATION

小林 清志会員

2013年10月28日逝去 91歳

静岡大学名誉教授

豊田工業大学名誉教授

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

1949年9月

1949年10月

1960年10月

1970年4月

1980年8月

1984年4月

1984年9月

1990年9月

1991年3月

東北帝国大学工学部大学院特別研究生修了

東北大学工学部助教授(1956年4月工学博士)

東北大学工学部教授

静岡大学工学部教授

同 工学部長

豊田工業大学教授

同 副学長

同 学長

EAJ入会

清水 祥一会員

2013年11月17日逝去 87歳

名古屋大学名誉教授

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

1943年3月

1948年3月

1948年4月

1949年3月

1972年12月

1982年4月

1986年4月

1987年4月

京都大学工学部工業化学科卒業

同 大学院特別研究生修了

同 講師(1948年7月工学博士)

同 助教授

名古屋大学教授(農学部)

名古屋大学省資源エネルギー研究センター長

同 農学部長

EAJ入会

東倉 洋一会員	1970年3月	東京大学工学部計数工学科卒業
2013年12月5日逝去 67歳	1972年3月	同 大学院計数工学専攻修士課程修了 (1980年5月工学博士)
日本電信電話(株)NTT R&D フェロー	1972年4月	日本電信電話公社入社
国立情報学研究所副所長	1983年2月	同 武蔵野電気通信研究所視聴覚情報 担当研究専門調査役
	1986年4月	(株)ATR視聴覚機構研究所聴覚研究室室長
	1992年3月	(株)ATR人間情報通信研究所 代表取締役社長
	1997年7月	日本電信電話(株)基礎研究所所長
	1999年1月	同 コミュニケーション科学基礎研究所所長
	2000年7月	同 先端技術総合研究所所長
	2001年3月	EAJ入会
	2003年10月	国立情報学研究所教授
	2005年4月	同 副所長

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

斎藤 孟会員	1945年9月	早稲田大学理工学部卒業
2014年1月2日逝去 90歳	1950年9月	同 大学院修了
早稲田大学名誉教授	1951年4月	同 理工学部助手
	1963年4月	同 教授(1993年3月退官)
	1983年5月	自動車技術会副会長
	1993年5月	早稲田大学名誉教授
	1994年7月	日本学術会議第16期会員
	1995年3月	EAJ入会

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

公益社団法人日本工学アカデミー 第2回〈通算18回〉通常総会開催のご案内

公益社団法人日本工学アカデミー

会員各位

2014年5月22日(木) 14時30分より、ホテルJALシティ田町(東京都港区芝浦3-16-18)において、下記議題により本会の第2回〈通算18回〉通常総会を開催致します。

尚、正式通知は別便にてお届け致します。

議 題(案)

- 1) 2013年度事業報告及び収支決算の承認
- 2) 2014年度事業計画及び収支予算の報告
- 3) 役員を選任
- 4) 終身会員制度について

総会後、例年通り各委員会・プロジェクト報告、特別講演並びに懇親会を計画しております。

編集後記

Google Glassの出現で、AR(拡張現実)の時代が本格的なものとなりつつある。機器を衣服やメガネのように身に纏い、現実世界にコンピュータの情報世界を重畳して人間の行動を助けるARやウェアラブルコンピュータの考えは、四半世紀も前のものであり、我が国でも多くの研究が行われてきた。しかも研究面では決して欧米諸国の後追いではなく、むしろ世界をリードしていた。しかし、実際に、世界で広まる切っ掛けを作った製品となるとなれば米国発である。そして、その後、日本の企業が後追いつける。スマートフォンも Likewise、ルンバのようなロボット掃除機も Likewiseである。アイデアや研究では日本が世界のトップレベルにあり、研究面では世界的に認められているにもかかわらず製品に結びつかない。どうも、研究開発の成果を新しい製品にする道が日本には欠如しているように思えてならない。

つい最近も同じようなことが起こった。DARPA(米国防総省高等研究計画局)が、福島原子力発電所の事故を契機に原子力事故などの災害に対処するロボットの公開コンペ「DARPA Robotics Challenge」を行っている。その中間審査会が、2013年12月に開催され、日本の大学発のベンチャー企業のSCHAFTが見事優勝を果たした。しかし、その企業は日本からの支援が得られずGoogleに買収された。勿論、コンペで優勝する前の買収であった。

(広報委員 館 暲)